

# 行政視察報告書

令和4年5月20日・23日

西脇市議会  
文教民生常任委員会

## 1 視察実施日及び視察先

- (1) 令和4年5月20日（金）  
西脇市立西脇南中学校
- (2) 令和4年5月23日（月）  
西脇市立楠丘小学校

## 2 視察目的

西脇市の小中学校におけるICT教育の現状について調査する。

## 3 調査事項

- (1) タブレットを活用した授業展開の様子
- (2) デジタル教科書の活用をはじめ教材化の工夫  
（活用教科や分野、学習効果等）
- (3) ICT支援員の活用状況

## 4 参加者

文教民生常任委員会

委員長 東野 敏弘

副委員長 高瀬 洋

委員 藤原 秀樹 藤原 哲也

高瀬 弘行 吉井 敏恭

村岡 栄紀 (23日欠席) 林 晴信

事務局 岸本 仁子 (23日) 春岡 香織 (20日)

## 所 感

東野 敏弘

### (1) 西協南中学校のICT教育を活用した授業参観に関して

1年生技術の授業は、タブレットを活用した立体を描く製図の授業。シートに基づきタブレットで製図する個人作業と、先生の全体説明をする時の切り替えが必要。担当の先生とICT支援員の連携は取れており、机間巡視をして遅れている生徒の指導がなされていた。また、作業が早く終わった生徒は、周りの生徒を教える助け合い学習もできていた。ただ、タブレット操作のレベルの違いが大きかったと感じた。

1年生英語の授業は、会話形式でテンポ早く進められており、タブレットは辞書代わりに調べるために活用されていた。教師の指示した課題を早く終えた生徒は、ドリルをしていた。英語の授業は、複数担任制（ティームティーチング）で、普段は2クラスに分かれて少人数学習が行われているとのこと。

2年生社会科（歴史）の授業は、導入部分で前の画面と教師が作成したプリントによって進められていた。授業の途中で、タブレットを活用していた。教師から送信されたシートに、生徒は自分の考えを書いていた。

### (2) 楠丘小学校のICT教育の授業参観に関して

校長室からのオンラインでの学校朝会。オンラインでの学校朝会は配信キットを学校独自で購入し、Wi-Fi接続状態の確認とともにに行っているとのこと。校長が率先してICT教育に取り組んでいると感じる。

楠丘小学校の取組は、①タブレット一人一台の活用・授業支援（オクリンク）、②協働的な学び・個人の思考を高める（ムーブノート）、③個別最適・個人によって進度が異なる（ドリルパーク）、④オンラインを活用した学習（オンライン朝会、6年生を送る会、他校との交流、長期欠席者への授業配信）。ベネッセのミライシードを活用し、ドリルパーク・ムーブノート・オクリンクに対応しているとのこと。

5年生の図工、2年生の学級活動、特別支援学級6年生の自己紹介に向けての名刺づくり、4年生の体育の授業参観。どの授業も、児童たちが上手にノートパソコンを活用していること、先生方も授業の中で計画的にノートパソコンを活用されている。中学校より小学校の方が、ICT教育に早くから取り組んでいた成果である。ま

た、特別支援教育において、ICTを活用した教育がより有効だとも感じた。

(3) 授業参観後の意見交換を踏まえ、問題点・課題

- ① オンラインは、1対1の知識の伝達はできるが、星型の意見交換はできない。
- ② 動画を一斉に見ると、Wi-Fiが安定しないため、グループで活用している。
- ③ デジタル教科書の活用では、英語と算数で先行したが、ICT教育と教科書の活用ではまだまだ不安な要素が大きいこと。
- ④ タブレットの活用は、日常的に行っていること。平日は家庭への持ち帰りは行っておらず、長期休暇に持ち帰っている。
- ⑤ 教師のスキルによって活用が異なるが、楠小ではほぼ全教師が活用しているとのこと。教師間格差を解消するための職員研修が必要である。
- ⑥ ICT支援員と教師とは、空き時間を活用しての意見交換やチームズを活用して意見交換をしているとのこと。ICT支援員の果たす役割が大きく、現状月2回（2学期から週1回になる）であるが、大規模校にあっては、1名常駐する必要が当面必要ではないかと考える。さらに、スクールサポーターの活用を考えるべきではないか。
- ⑦ ICT教育について、家庭からの不安に対して、学校・教育委員会はPRをしっかりと行ってほしい。
- ⑧ ICT教育は、特別支援教育に有益であり、個別の特別支援が必要である児童生徒への取組をさらに研究してほしい。

高瀬 洋

『タブレットを使った教育の現場調査』

5月20日・西脇南中学校、5月23日・楠ヶ丘小学校で以下の学年と科目の授業視察を行いました。

・南中学校：1年/英語、2年/技術、3年/社会

・楠ヶ丘小学校：5年/図工、2年/図工、支援学級、4年/体育

タブレットの操作は、多少時間がかかる生徒も見受けられましたが、助け合いながら覚えていました。今後は経験を積むことで操作面は解消できると思いました。小学生の時からタブレットに馴染むことは大切なことと思います。

また、ICTを活用することで児童生徒の学習成果物をクラス全員で簡単に共有できることは大きなメリットであるし、個々の学習の履歴を残せることは楽しく復習でき、効果があると感じました。

I C Tを活用した教育は、まだこれからという段階なので、先生も経験を積むことで、教材コンテンツ等も蓄積でき、より効果がある授業が行えるようになるのではないかと思います。

今回は市内の小中学校の視察でしたが、常任委員会では市外のI C Tの活用が進んでいる学校も視察することにより、本市の優れている点や改善や努力が必要な点を精査しI C Tの活用がより進むよう提案していきたいと思ひます。

#### 藤原 秀樹

これからの学校教育の中、I C T教育は最も重要な点であると思ひます。西脇市を選んで住んでいただくための選択肢として教育の充実やレベルの高さや高い学力の習得は選ばれるための重要事項です。

そこで遅れていると言われているI C T教育の現場を視察させていただいたが、学校、教師、I C T支援員等で協力し工夫されており、オンライン授業や家庭でのタブレット使用の事ばかりが噂されていますが、教育委員会の説明通り対面授業で各教科授業に使用されていました。保護者の方へG I G Aスクール構想のわかりやすい説明や授業参観などの場でわかりやすく知らせ理解していただく事が必要だと思ひました。

タブレットを使っている子ども達を見ると楽しく進んで学んでいました。思っていた以上に想像力の向上、生徒の意見の吸い上げ、瞬時のアンケート集計、ペーパーレス等に効果的で、これを進めて行くと凄い教育ができ可能性は無限だと思ひました。子ども達にとってタブレット授業は普通の事になっていると思ひました。

しかし、生徒の操作の格差、学校のレベルの格差、電源等の施設の対応、機材・設備の不足、I C T支援員の不足など課題も山積です。

課題解決のためには情報担当・I C T支援員による研修の実施、I C T支援員を学校に常駐するなどの強化が急務だと思ひました。先生方とのお話の中で、学校とI C T支援員との信頼がしっかり築かれており、頼りにされていると感じました。企業ではよくあるヘルプデスクやI C T支援教育開発研究のチーム的なものが教育委員会に必要ではないか。情報社会は問題も多く情報モラル研修を行い、子供たちに規制するばかりでなく、付き合い方や端末の先に何があるか指導していく必要があると思ひます。

米百俵の精神でこれにあたり、西脇市の宝である子ども達にどこよりも良い教育を受けさせてあげなければならないと思ひました。

(1) 西脇南中学校

I C T 支援員 1 人が月 2 回着任されているが、支援員がいない日は、先生 1 人でタブレットを使用し授業をされるのは、かなり負担がかかる。⇒支援員の増員の検討が必要と思われる。

生徒間でも、タブレットの操作スキルが違うため、先生と補助員だけでは、きめ細やかな配慮が出来ているのかと思う。

校長先生からは、タブレットのバッテリー充電が授業中に切れないように、今は学校で充電し、自宅への持ち帰りは行っていない、との事でした。

教育委員会からは、今後毎日家に持ち帰り、学校に持参するようになるという話を聞いている。タブレットを自宅に持ち帰り、バッテリー充電ができ、学校の授業で使えるようにどの学校もしてほしい。また、問題点を聞き改善を。⇒タブレット 1 台に対し 1 本の自宅用アダプターが必要ではないか。

技術科授業では、タブレットを使用した立体図を記載していて、想像力が豊かになると実感しました。（社会で役立つ授業）

社会科の先生がタブレット授業で、教材を自分で作成し工夫した授業に感銘致しました。

社会科授業では、休んだ生徒 1 人が自宅でタブレットを使用し、授業に参加していた。

今後の課題として、ハイブリット授業がどのクラスも出来るように機材をそろえるべきである。

先生によってもタブレット授業に対して得意・不得意があり、先生のスキルアップも課題である。

中学生になると、教材資料が多く、机の上にタブレット置くとスペースが限られている為、タブレットを落としそうであり、子どもが使いにくそうであった。

(2) 楠丘小学校

白川校長先生にタブレットのスキルがあるため、月 1 回の学校朝会を各教室の子どもたちとオンラインでつなぐライブ配信に感銘致しました。

2 年生の生活科のタブレット授業では、操作の速い子どもやクラスメイトに教える子どもなど、子ども同士教えあう場面があり、仲間意識があり、良い学習環境となっている印象を受けました。出来る子どもが出来ない子どもに教えることで、補助員の代わりとなり、タブレット使用のスキルに差を埋めることにつながればと感じました。

楠丘の校内の通信ケーブルが古いため、タブレットの使用状況に

より通信速度が遅くなることがあるようなので、どこかのタイミングで通信線の交換を考えてください。

高瀬 弘行

(1) 西脇南中学校

中2の技術では、立方体の一部を切り取った図を、タブレットを使用して「転写」する授業であったが、立方体の定義を知ったうえで「転写」する場合、平行した直線から「転写」するはずであるが、外枠となる「ひし形」から「転写」する生徒が多く、本来の「製図」の手法とは異なり、「線の引き方」を学ぶ段階であると感じた。

中1の英語では、辞書代わりに使用しているのが中心であったが、従来の辞書に比べて、例示などが分かりやすいように感じた。

中3の歴史では、タブレットを使用して歴史上の人物の検索などに活用していたが、1名の欠席者に対して、授業を配信していたのが印象に残った。

(2) 楠丘小学校

オンライン朝会では、各クラスと校長室を双方向でつなぐなど実践的に使用されていた。また、その結果として、体育館などへ移動、集合する時間など時間短縮にも生かされていると感じた。

小5の図工では、粘土による作品づくりの経過を写真にとり、それらの写真をつなぎ合わせて連写できるソフトで、作品作りの経過を学んでいた。作品作りの経過を振り返ることで、表現力などの醸成に役立てるように思えた。

小2の図工では、パスワードをローマ字入力するなどタブレットの立ち上げ方法から学び、校内で自らが関心ある被写体を選び、その写真撮影を行う授業であったが、主体性の醸成に役立っていると思えた。

特別支援学級では、読んだり書いたりするのが苦手な児童が、視覚を活用することで、知識として身につけるのに、タブレットが役立っていると思えた。

小4の体育では、タブレットを利用して、「体操（開脚後転）」の様子を動画で撮影する授業であった。自分の「体操」の様子を知ること、欠点などの克服に役立つと同時にその経過も知ることができる。また、グループでお互いの「体操」の様子を撮影を行うことで、学びあいの大切さを感じるのではないかと思えた。

(3) まとめ

中学校では、通常の学習時間に余裕のないこともあるのか、授業を視察した範囲では、全タブレットの基礎的な使用に留まっている

印象を受けた。今後は、英語では「ネイティブ英会話」や技術では「3Dプリンター」などが本格的に取り入れられると期待する。

小学校では、タブレットというアイテムを通して、自ら学ぶという「主体性」と画像で学ぶという「表現力」を伸ばす機会となっている印象を受けた。

小中学校を通じて、タブレットを利用する長所としては、先生方の情報収集・分析が圧倒的にスピーディであること。一方、課題として、タブレット使用が一般化する中で「ユーチューブの長時間視聴」「SNSを通じたいじめ」「視力低下」などの課題も山積してくると思われる。

また、喫緊の課題として、教育現場で求められているのは、ICT支援員の充実と考える。今回の視察でも、各教室で、ICT支援員による技術的なサポートが行われていた。また、ICT支援員の充実は、大変な労働強化となっている教師の労働軽減にも役立つと思える。

一方、西脇市では、支援員3人の委託料として、予算ベースで、小学校で約1,610万円、中学校で約866万円が計上されているが、直接雇用に向けた検討も必要ではないかと考える。

最後に、小・中学校とも、生徒と先生が真摯に学ぶ姿勢が印象に残った。

吉井 敏恭

(1) 西脇南中学校の視察について

技術科の授業参観。初めてタブレットを使用した授業を参観した。図形を描く授業は、例えば職業訓練所のCAD（キャド）の使い方の講習会さながらであった。立方体を回転させたときの見え方を理解することが、授業の目的と考えるが、タブレットの使用法の解説にも見て取れた。

タブレットの使いこなし方に個人差がある。出来た生徒には次々と課題が提供されるが、これが本当に立方体を理解したのか不安である。

英語科の授業参観。映画や多彩な情報を盛り込みながらの授業。先生の話術、70歳を超えた私の先生像とは異なるものであった。書く力はともかくとして、聞く力と話す力は身につくと感じた。

社会科の授業参観。さながらNHKの歴史探偵の1コマの様。授業の準備の大変さを感じた。1つのテーマを掘下げることと、学力評価の関連を知りたい。

授業参観を通して、タブレットを使用した授業の到達目標が何な



のか。いわゆる成績の良い（学力評価の高い）生徒とは？3学期になると、どのように変化するのか、是非、同じ科目を授業参観で確かめたい。

充電ボックスから、アダプターの先が廊下に垂れ下がっている。足で踏みつける可能性もある。後の楠丘小学校との比較で強く感じた。「垂れ下がっている」状態を平気に受け止めていることにあきれる。物を大切にすることを忘れていないか。もしもアダプターの修理に保険が適用されるのであれば疑問である。

(2) 楠丘小学校の視察について

オンライン朝会を見学した。タブレットを活用した優れた取組と評価したい。機材を使いこなす白川校長のスキルがあり、更にICT支援員に支えられての成果と考える。全ての小学校で同様の取組が可能なのかスキルアップの取組が必要である。

粘土を少しずつ変化させながら、動画を作成するコマドリを参観した。小学生の方が、タブレット等に慣れ親しんでいるのか、（南中学校の）中学生に比べ個人差も少なく、楽しそうに安心して参観できた。

特別支援教室での取組は、個々の生徒にあったプログラムや機材の提供が望まれる。

体育の授業。「開脚後転」の練習を、タブレットによりフォームをチェックするもので、タブレット活用の好事例である。模範演技と自身の画像を重ねてフォームの改良に取り組める…そんなことが可能になることに期待する。

(3) 視察をとおして感じたこと

タブレットを取り巻く環境について情報の共有が必要である。タブレット活用の目標、家庭（保護者）を含めた利用上のルール、タブレット及び周辺機材の管理・更新など。

契約しているベネッセでは、在学中は個人のデータが蓄積され、データの閲覧が可能とのこと。言い換えると、卒業すれば過去データは閲覧できなくなる。

我が子の時代には、卒業時、在学中の絵や作文が「成長の記録」として配られ持ち帰った。自分の成長の記録として、大人になってからでも懐かしいものである。

昔は、したくても出来なかった記録が、データとして在学中は保管されている。卒業時、自分のデータがCD-R等にコピーできたらと考えるが、ライセンス上の問題があり無理とのこと。今は、そんな時代でないのかも知れないが。

『西脇南中学校におけるタブレット端末の取組』

本年度の特定所管事務調査事項である『西脇市のICT教育』の調査の一環として、西脇南中学校に授業参観にお伺いしてきました。調査内容は「西脇南中学校でのタブレット端末の取組」についてであります。

南中学校では「職員向けのタブレット講習会」「授業でのタブレット使用」「リモート授業への対応」など懸命にICT教育に取り組んでおられます。タブレット使用の成果としては、「多様な意見を引き出しやすい」「生徒の興味関心が高まる」といったことや、業務の効率化といった成果が出ているようです。

半面、課題として特に「自宅で使用制限がかかる」ということが挙げられており、保護者からもユーチューブで動画を自宅で長時間視聴するので困っている、といったような相談も寄せられているようです。

そういった課題解決のために、学校では情報担当・ICT支援員による定期的な研修や情報モラル研修の開催、また、生徒たちにタブレット利用のルールを考えさせたり、フィルタリングの範囲の検討など、試行錯誤を繰り返しておられます。

実際の授業を参観して感じたのは、ICTを活用した授業は、これまでの一方通行型授業とは違い双方向型であり、アクティブラーニングや読解力といった、これからの教育の方向性に適したものであると感じました。

しかし、同時に、生徒間におけるタブレットの操作状況や理解度には差があるようで、このままでは、できる生徒は次々に進むが、できない生徒はなかなか進めないといった格差が、今まで以上に広がるのではないかと危惧するところでもあります。

そして、タブレット操作等に関して、しっかりと生徒をサポートするのがICT支援員であり、正直、人数が少ないなと感じましたが、ICT支援員を増やせば解決するのかといったことは、現時点では何とも言えないところでもあります。

ICT教育において、まずもって最優先にすべきなのは、“習うより慣れろ”で、生徒がタブレットに触れる機会をできるだけ増やしていくことだと考えます。学校でも自宅でも、あらゆる場所でタブレットをどんどん使って、完全に使いこなせるようになることです。しかし、現在、南中学校ではタブレットは持ち帰ることができず、将来的には持ち帰りはできても、バッテリーのある限りの使用といった制約が設けられとのこと。また、近隣市町も同様の対応をとっているようです。

これは、必要のないものを見たり使ったり、遊び等に没頭したりしないようにするための措置ではありますが、極力家庭では使わせないといい、封じ込みを目指したゼロコロナ対策的なやり方では、何も前に進みません。だからこそ、この課題に関しては、きちんと生徒の自覚や家庭の理解を求め、どこかできちんと折り合いをつけて、生徒がいつでもどこでも自由にのびのびとタブレットを使えるようにするべきだと考えます。

生徒のタブレット使用を制限することにより、都市部や先進地域にこれまで以上に差をつけられ、本市が目指す全国トップクラスの学力が遠ざかってしまわないように。

本市のICT教育はまだスタートしたばかりで、課題はまだまだ多くあると思われませんが、本市のこれからの取組次第では大きく前進することができるものであります。今後の展開に期待しながら動向を注視していこうと思います。

林 晴信

(1) 西脇南中学校

技術と英語と社会の授業を視察。

技術では製図をタブレットで行うという授業。コンパスや三角定規の私らの時代とは変わったなあという印象。恐らく実社会でもCADとかでやっちゃうので、アナログ技術は意味ないのかなと思ったりもする。回転体の製図に手間取っていたが、今ならワンクリックで回転しちゃうよなあとも思ったりもした。でも数学的には意味があるように思える。

英語の授業では、今回はあまりICTの恩恵はなさそうだった。テキストを使った通常スタイル。でも授業の中身は私らの頃とは大違い。中1の5月なんて、昔だと this is a penとか、第一文型がどうか、第二文型がどうか意味の感じられないことを習っていた気がする。今日は、What food do you like?とか、文法より会話主体から授業が成り立っていた。

社会は先生オリジナルのパワポを使った楽しい授業になっていた。パワポの使い方、見せ方が上手いと感じた。元禄時代のナンバーワン政治家をみんなで決めちゃおう！と興味の持っていていかせ方も上手いなと思った。YouTube世代だなあとも思う。正直、私も視察を忘れて授業に引き込まれたくらい。

生徒が一人リモートで受けていたが、配信するというスタイルで双方向ではなかった。機材もないし仕方ないと思う。

総じて感じたのは、生徒のスキルもまちまちなので、先生の苦勞

は大変なものだったということ。

I C T支援員も走り回っていたが、そもそも2週間に1回しか学校にいないので、いない時はどうなっているんだろうと不安に思う。

年々、教師も生徒もスキルは上がっていくんだろうけれど、まだ数年は常駐のI C T支援員は必要だと感じた。

## (2) 楠丘小学校

I C Tに長けた白川校長の陣頭指揮があつてのことかわからないが、非常に効果的にタブレット等を使っているように思えた。

授業参観できたのが図工と体育だけだったので、社会や算数、英語などの主要教科でどう使っているかを見ることができなかつたのが残念だった。

楠丘小学校では学校独自予算でカメラやスイッチャー等の配信機材も揃えていて、オンライン朝会も見せてもらったが、手慣れた感じでスムーズに行われていた。

授業は濃厚接触等で出席停止の児童にはオンライン配信等を行っているようだが、双方向での授業はやっていないとのことだった。当然のことながら、オンライン授業を行えるだけの設備は整ってはいない。私自身、リアル（対面授業等）をオンラインが追い越すことはあり得ないとはいわないが、当面の間は無いだらうと思う。ただ、距離と時間を超越できるというオンラインの良さを上手く活かしてリアルを補うことは積極的に行うべきだと思う。こどもたちの成長は早く、小学生、あるいは中学生として学べる時間は短いことから（感染症含む災害に負けない取組を）。

図工でのクレイアニメーションを作成する授業は、児童たちの興味を強く惹くクリエイティブな取組でS T E A M教育だなあとはいつつ見せてもらった。児童たちもほぼトラブル等ストレスもなく、お互い進捗を見せ合いながら、工夫を重ねていく作業は非認知能力を大いに高めるものではないかと思った。

体育での開脚後転のマット運動をタブレットで自撮りして振り返るといふのは単純なことながら、昔なら自分の姿など見ることもなく、最近でもビデオで撮影して…ということを見ると教師の労力等をかなり軽減している。ここでも児童同士指摘し合っていたところを見ていると、単にタブレットで撮影しているだけでしょ！とはいえない効果があることがよくわかる。

また特別支援教室での授業も見せてもらったが、児童の名刺をパワーポイントで作るといふ授業も、教師とマンツーマンで視覚にうったえながら進めている様子を見る限りは、教科書や黒板を使う授業よりも興味を惹いて児童の集中力も高まっていたように思えた。白川校長も「支援を要する児童とI C Tは親和性が高い」と言われ

ていたが、得心した。今後、ますます特別支援教室で使えるようなさらにG U Iに特化したアプリもどんどん出てくるだろうから期待が持てるのではないだろうか。

楠丘小学校でもI C T支援員は走り回っていたが、児童のスキルも、見る限り、南中学校の生徒のスキルより高いように思えた。支援員に尋ねると、学年が下に行くほどパソコンやタブレットに慣れているので、授業もスムーズとのことだった。

両校を視察して思うことは、「タブレットやパソコンを文房具のように使っている」ことである。もちろん、スキルに多少の差異はあったが、タブレットを特別視している様子は無い。校長に聞いてみると、少し前まではタブレットを使うことだけでテンションが上がり、騒いでもいたが、現在はそのような光景は見られないとのこと。自然に授業のツールのひとつとして使っている様子がかがえた。

とはいえ、予測不可能なトラブルへの対処、授業の組み立て相談等々、I C T支援員のさらなる増員は必須だろうと思う。最低限、中学校なら常駐できるくらいの手厚さは、ここ数年は必要なのではないか。教員のスキルがさらに上がってくれば、教員だけで何とかなるかもしれないが、現在では難しいだろう。またI C T支援員だけでなく、I C Tスクールボランティアなども募集して活用する必要があると思う。

今後先進地への視察をいくつか行い、事例研究をして、西脇市の現状と対比させて、提言に結び付けたいと思う。